

令和元年6月9日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02854

研究課題名(和文) キャリア教育を導入した英語授業の実施とその効果の実証研究

研究課題名(英文) An Investigation of the Effects of Career Education in English Classes

研究代表者

岩本 典子 (Iwamoto, Noriko)

東洋大学・理工学部・准教授

研究者番号：40568060

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学1、2年生の必修英語授業の中にキャリア教育エクササイズを導入し、英語が将来の仕事や就職活動に与える影響を意識させることで、英語学習モチベーションの向上を試みた。アンケートと学生インタビューを用いてその効果を検証したところ、就職や将来の仕事における英語の重要性を意識することができた学生の多くは、外発的動機づけの外的調整が2年間を通じて高く、英語力も向上する傾向にあることが分かった。しかしその一方で、英語習熟度の低い学生の多くは、自分の将来や就職と英語学習を結びつけることができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化の加速する日本において、英語の重要性はますます高まっているにも関わらず、日本人大学生、特に非英語専攻学生における、英語学習モチベーションの低下がしばしば指摘されている。本研究では、キャリア教育を英語授業に取り入れるという試みを実践し、大学生の英語学習モチベーション減退という問題に取り組んだ。その結果、比較的英語習熟度の高い学生には、キャリア教育エクササイズはモチベーションと英語力の向上に効果があることが分かった。

研究成果の概要(英文)：Career education exercises were incorporated into mandatory English classes for the first-, and second-year students, in order to make them consider the importance of English for job seeking and their future careers, through the activities of creating present and future resumes as well as keeping weekly logs. The effects were measured through questionnaires and interviews and it was found that those who were able to recognize the importance of English tended to keep their external regulation high over two years. This was due to encouraging them to think about how they could use English for job seeking purposes and in their future jobs, whereas the exercises did not motivate the lower proficiency students, because they failed to imagine their future-selves using English.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語教育 英語学習動機 キャリア教育 自己決定理論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学受験が終わった後、多くの大学生、特に非英語専攻学生は、英語を学習するモチベーションが低下すると言われている。例えば Berwick & Ross (1989)は、大学1年生の英語学習モチベーションを1年間調査し、多くの学生のモチベーションの低下を報告しており、大学受験後に英語を勉強する目的を失ってしまったことが原因だとしている。さらに、Sawyer (2007)や Miura (2010)は、非英語専攻の大学生は専門科目や課外活動により多くの力を注ぐ傾向にあるため、英語学習意欲は低下すると述べている。その一方で、Hayashi (2005)によると大学3年生は就職活動が近づくため、英語学習意欲が高まるという結果が報告されている。さらに Iwamoto (2017)では、大学入学後に理工学部生の英語学習モチベーションは低下してしまったが、2年生の終わりから就職活動を意識するようになった結果、一部の学生のモチベーションが向上したことが分かった。

大学生の就職活動において、企業の求める人材の高度化と学生の未成熟化という問題点が指摘されるようになり、その問題に取り組むため2000年代に入って多くの大学がキャリアセンターを設置し始めた(谷内, 2014)。ここでは、大学3、4年生の就職支援だけでなく、1、2年生に対する早期キャリア教育を実施している。早期キャリア教育では、学生に早い時期に仕事と人生の結びつきを考えさせて、主体的に行動し充実した大学生活を送るようにさせることを目的とする。本研究では、この早期キャリア教育を理工学部1、2年生の必修英語授業に取り入れる試みを行った。

2. 研究の目的

先行研究より、多くの大学生は英語学習モチベーションが低下する傾向にあるが、Hayashi (2005)や Iwamoto (2017)の結果から、就職活動が近づき将来のキャリアを考え始めると、モチベーションが高まることが分かった。そのため本研究では、英語授業の中でキャリア教育を導入し、英語力が将来の仕事や就職活動に与える影響を意識させることにより、英語学習モチベーションと英語力の変化を調査した。

具体的には、以下の試みを実践した。(1)平成28年度理工学部入学生を対象に、1、2年生の必修英語授業に、キャリア教育エクササイズ(自分を知る活動、現在と未来の英文履歴書、英文履歴書の添え状、英文ログノート)を導入した。(2)理工学部の協定校アメリカ・ペース大学の教員を招聘し、理系学生の留学やアメリカのキャリア教育に関する講演会を平成28年度と29年度に開催した。(3)実践的英語運用能力の学習支援として、グローバル・コミュニケーション・スペースを設置し、ディスカッションクラブや個別指導を実施し、授業外でも学生が英語に触れられる機会を提供した。

3. 研究の方法

研究対象者は平成28年度理工学部新入生800名である。彼らの1、2年次の必修英語授業にキャリア教育を導入した。

(1) キャリア教育エクササイズの実施

自分を知る活動

自分史を英語で書かせる。自分の過去を振り返ることで、自分の成長の土台や大学に入った目標について考えさせる。さらに自分の長所と短所について英語で書かせる。これにより、自分の得意なこと・価値観について考えさせることができる。

現在と未来の英文履歴書作成活動

最初学生に現在の履歴書を作成させ、これにより学生は現状把握をする。次に未来の履歴書では、3年次の終わりの自分、つまり就職活動直前の自分を想像して、その時点の履歴書を作成していく。履歴書には日付も記入するため、大学生のこの時期に留学をする、インターンシップをする、資格を取る、TOEICテスト700点を取得するなど、未来の目標を作成することができる。そして毎学期履歴書の更新をしていき、この際に未来の履歴書で計画した事柄を遂行できければ、現在の履歴書に書き移す。もし新たな目標ができたならば、未来の履歴書に記入する。2年秋学期には履歴書の添え状を作成させ、履歴書に基づく自己アピールを書かせた。

英文ログノート

学生たちに毎週何らかの知的活動をさせる(本を読む、新聞記事を読む、教養番組を見る、美術館に行く、英語ディスカッションクラブに参加するなど)。そして毎週行った知的活動について1パラグラフの報告を英語で書かせる。これを毎学期、9週間実施する。知的活動についての週間ログノートをつけることで、自分の活動を振り返り、毎日の生活における知識・能力の獲得を意識させることを目的とする。

(2) 効果の検証

キャリア教育を導入した英語授業の効果を検証するため、混合研究法を用いて、量と質両方のデータを収集する。量的データについては、自己決定理論(Deci & Ryan, 1985)に基づくアンケートを作成した(アンケートの回答には6ポイント・リカートスケールを使用)。同一のアンケートを2年間実施し、学生の英語学習モチベーション変化を長期的に調査した。また英語力変化を測定するため、2年間で3回分のTOEIC-IPスコアを収集した。質的データに関しては、2年間の英語必修授業終了後、21名の学生に個別インタビューを実施し、キャリア教育を導入し

た英語授業の感想や英語モチベーションの変化について聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) 量的データの分析

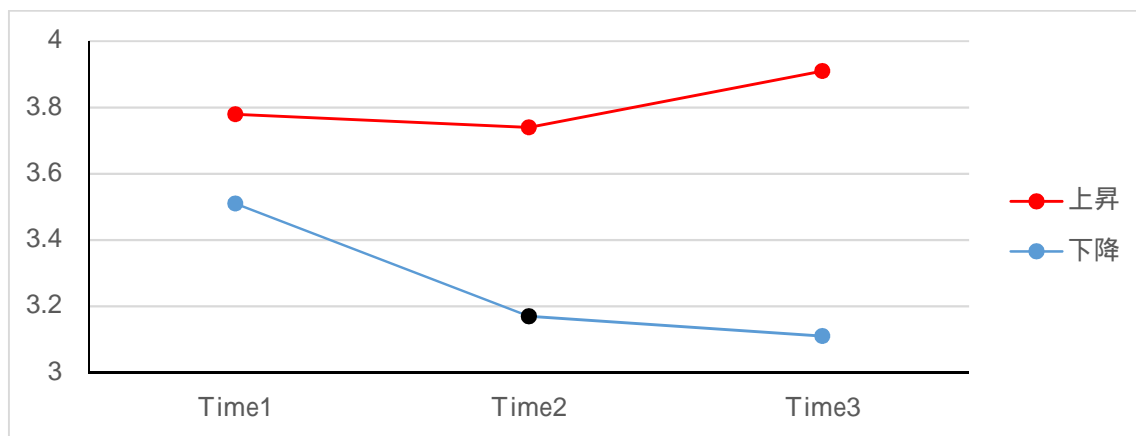
収集したアンケート・データを、統計ソフト SPSS を使って因数分析をした。その結果、4 因子が見つかった：内発的動機(例：英語を学ぶことは楽しい)、同一調整(例：自分の将来にとって、英語は重要だと思う)、取り入れ調整(例：英語が話せないとうしろめたい感じがする)、外的調整(例：就職に有利になるため英語を勉強している)。4 因子全てアルファ係数は.70 以上であった。

次に、英語学習モチベーション変化と英語能力変化の関連性を調査するため、3 回の TOEIC-IP スコアから、2 年間で継続的にスコアが上昇した学生 103 名(上昇グループ)と下がった学生 111 名(下降グループ)を抽出し、分析を行った。上昇グループは 1 回目のスコア平均点は 316.94 点(標準偏差 77.84 点)、2 回目は 395.10 点(96.08 点)、3 回目は 434.71 点(111.63 点)に上昇した。一方で下降グループは、1 回目のスコア平均点は 332.34 点(標準偏差 58.75 点)だったが、2 回目は 322.43 点(62.95 点)、3 回目は 257.12 点(64.68 点)に下がった。

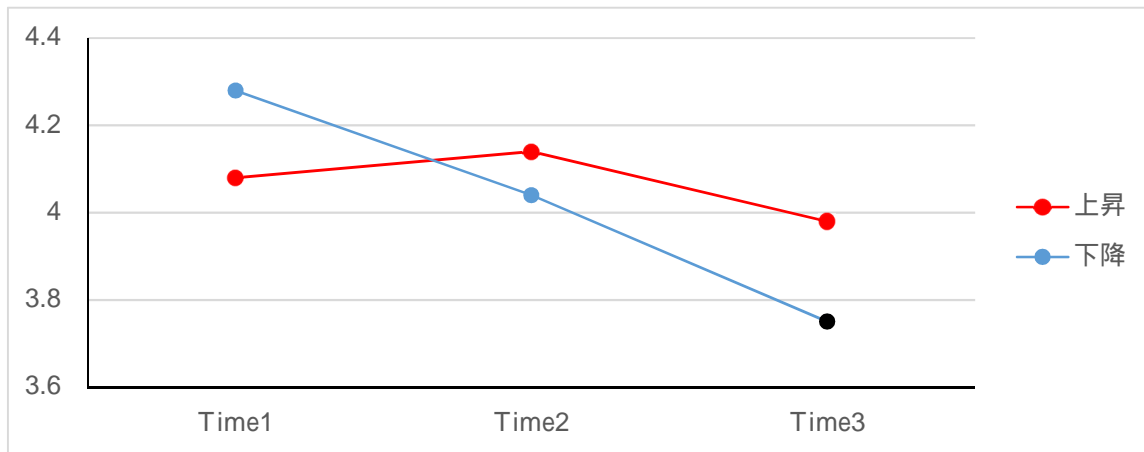
TOEIC スコア変化が 2 年間のモチベーション変化とどのような関係があるかを調査するため、反復測定分散分析を行った。群内因子は時間(Time 1 = 1 年生 4 月、Time 2 = 1 年生 1 月、Time 3 = 2 年生 1 月)、群間因子はスコア変化(上昇と下降)、従属変数は動機付け要因(内発的、同一、取り入れ、外的)である。分析の結果、内発的動機と外的調整において、時間とスコア変化に有意の交互作用が見られた：内発的動機： $F(2, 424) = 8.62, p < .01$ 、外的調整： $F(2, 424) = 3.63, p < .05$ 。すなわち、同一調整と取り入れ調整では、上昇グループと下降グループのモチベーション変化に大きな違いはなかったが、内発的動機と外的調整において、上昇グループと下降グループで、モチベーション変化に違いがあったことが分かった。

同一調整と取り入れ調整は、両グループとも、1 年次の終わりに有意の低下が見られた。同一調整においては、下降グループで 2 年次の終わりに更なる有意の低下があったが、上昇グループでは変化は見られなかった。取り入れ調整は、両グループとも 2 年次には有意の変化はなかった。

次に、両グループで有意の違いが見られた内発的動機と外的調整について見ていく。最初に内発的動機においては、以下の図に示すように、上昇グループは 2 年間で有意の変化は見られなかった。下降グループの内発的動機は、1 年生の終わりに有意の低下があった(線グラフの黒点は有意の変化があることを示す)。内発的動機が高い学生と英語力向上の関連は過去の研究でもしばしば報告されており(e.g., Noels et al., 1999, 2000)、本研究でも同様の傾向が明らかになった。



続いて外的調整においては、上昇グループは 2 年間で有意の変化はなかった。下降グループは、2 年生の終わりに、有意の低下があった(下の図を参照)。外的調整の要因には「良い仕事を得るために英語を勉強している」「英語資格試験のために英語を勉強している」という項目が含まれており、キャリア教育と関連した英語学習動機づけと言えるだろう。上昇グループの学生は、おそらくキャリア教育エクササイズにより、就職や将来の仕事における英語の重要性を意識することができたのではないかと、そしてそれが英語力向上につながったと言えるだろう。反対に、下降グループの学生たちは、キャリア教育エクササイズにより英語学習モチベーションを高めることはできず、英語力も低下してしまった。



(2) 質的データの分析

2年間の必修英語授業が終了した後、21名の学生を対象にインタビュー調査を実施し、授業でのキャリア教育、特に2年間続けた「現在と未来の英文履歴書」と「英文ログノート」について聞き取りを行った。英文履歴書については、ためになったという意見と、それほど影響を受けなかったという意見の両方があった。1年生の最初の時期に、自分の現在の履歴書に空欄が多いことにショックを受けた学生もいるが、「1年生のうちはまだいい」と考える学生もいた。しかし2年生になっても空欄が多いと、ほとんどの学生が焦りを感じたと答えた。また、現在の履歴書が徐々に埋まっていくことで充実感を感じるという意見もあった。このことから学期毎に、現在と未来の履歴書を更新させることは有効であることが分かった。だが履歴書作成活動が必ずしも英語学習動機づけと結びつくわけではなく、特に英語力の低い学生は、英語を使用する仕事を避ける傾向にあり、自らの就職や仕事と英語の関連性を見出せなかった。

次に英文ログノートについては様々な意見があった。1週間に1パラグラフの課題について、ちょうどよかったと感じる学生と負担であったと感じる学生の両方がいた。自主的に知的活動を行っているため、書くことに困らない学生がいた一方で、なかなか書くことが見つからない学生もいた。ログノートを書くために、新聞を読むなど知的活動を行ったという学生もいたため、半ば強制的ではあるが、知的活動を促進できたようである。そして、毎週1パラグラフの英語を書くという活動は、英語力向上に役立ったという声が多く聞かれた。

(3) 考察

キャリア教育エクササイズにより、就職や将来の仕事における英語の重要性を意識することができた学生の多くは、外的調整が2年間を通じて高く、英語力も向上する傾向にあった。よって、英語授業でのキャリア教育は一定の効果を上げることができたと言えるだろう。しかし効果が見られた学生は、英語を使った将来を意識することのできた、比較的英語習熟度の高い学生が多かった。その一方で、多くの英語習熟度の低い学生は、自分の将来や就職と英語学習を結びつけることが出来ず、英語学習モチベーションが下がり、その結果英語力が低下してしまった。今後の課題として、英語と自らの就職や仕事に関連性を見出せない英語習熟度の低い学生に対しては、英語を学ぶことがより豊かな人生へつながるとする「ライフキャリア」に基づくエクササイズを考案し実施する必要性を感じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Noriko Iwamoto L2 Motivational Change of Japanese Engineering Majors During Their First Year at University, JACET 学習者要因研究会研究集録, 1号, 15 - 24, 2018年 査読あり

Noriko Iwamoto Are Engineering Majors Intrinsically or Extrinsically Motivated?: Relationship between L2 Motivational Types and Motivated Behavior, 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 20号, 1 - 17, 2018年 査読あり

Noriko Iwamoto Retrospective Interview Study on L2 Motivational Change, 異文化研究, 13号, 79-108, 2017年 査読あり

〔学会発表〕(計11件)

Noriko Iwamoto Possible L2 Selves and Career Education Exercises in English Classes, TESOL, 2019年

Noriko Iwamoto Effects of Resume-Writing Exercises on Students' Possible L2 Selves and Career Orientation (poster presentation), American Association of Applied Linguistics, 2019年

Noriko Iwamoto Relationship between L2 Motivation and L2 Motivated Behavior of Engineering Majors, JACET Learner Development SIG 月例会, 2018年

Noriko Iwamoto Enhancement of Possible L2 Selves through Career Education Exercises in English Classes, Second Language Research Forum, 2018年

岩本 典子 キャリア教育エクササイズが英語学習モチベーションに与える影響について, 全

国英語教育学会京都研究大会, 2018 年

Noriko Iwamoto The Effects of Career Education Exercises on L2 Motivation in English Classes, Asia TEFL, 2018 年

Chiyo Hayashi, Noriko Iwamoto, Kota Ohata, & Reiko Yoshihara. EFL Learners' Beliefs and Motivation, Psychology of Language Learning 3, 2018 年

Hiroyo Yosida Assessment Tool and Student Motivation, 東洋大学スーパーグローバル大学創成事業セミナー シリーズ, 2018 年

Noriko Iwamoto, Hiroyo Yoshida, & Michael Schulman Effects of Global Communication Space and Career Education on Engineering First-year Students, 第 56 回大学英語教育学会(JACET)国際大会, 2017 年

岩本 典子 内発的・外発的動機が理工学部生の英語学習にもたらす影響について, 第 41 回関東甲信越英語教育学会, 2017 年

吉田 宏予 グローバル化時代と理工系学生のコミュニケーション能力, 東洋大学人間科学総合研究所, 2016 年

〔図書〕(計 1 件)

岩本 典子 「第 17 章 言語学習とモチベーション：英語授業における英語履歴書作成活動」『学問的知見を英語教育に活かす - 理論と実践』野村忠央他編 東京：金星堂 2019 年出版予定 査読あり

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：吉田 宏予

ローマ字氏名：Yoshida Hiroyo

所属研究機関名：東洋大学

部局名：理工学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 00320789

研究分担者氏名：マイケル シュルマン

ローマ字氏名：Michael Schulman

所属研究機関名：東洋大学

部局名：理工学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：50328647

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。